BOOK X — 見えざる戦争

第02章 — 監視下の都市

01 — 二枚目の地図

午後三時、交通局の他の代表者たちが退席を命じられたあと、市の技術者が一人、会議室に残るよう求められた。彼は東部の路面電車の運行停止について協議するものと思っていた。しかし、軍の将校が彼に示したのは、主要な交通施設が白い四角で示された岡京の地図だった。

技術者には見覚えのある地図だった。洪水の危険がある地区から住民を避難させる合同訓練のために、彼の部署が作成したものだ。数か月前には、緊急給水の拠点も含めるよう改訂されていた。

地図の横の壁には、一人の男の写真があった。

将校は、白い四角のうち、いくつが市の身元認証ネットワークに接続されているかと尋ねた。

「ターミナルはすべてです。停留所は全部ではありません。建設された時期によります」

「接続されていないところは？」

「乗客の総数を送信しています。誰が乗ったかまでは分かりません」

将校は何かを書き留めた。緊急給水所についても同じような質問をした。

技術者は、給水システムが各世帯の割当量に対して実際に支給した水の量を記録していると説明した。受け取りに来た個人の身元が必ず確認されるわけではない。地区によっては、一人で複数の世帯の水を受け取ることもごく普通だった。

「それを変えることはできるか？」

「住民への指示を変更しない限り、無理です」

将校は、新しい指示を準備しているところだと告げた。

そこで初めて、技術者は会議の目的を理解し始めた。改めて写真を見た。その日の早い時間、路面電車を待っているときに見かけた顔だった。給水所の運営に関係があるとは思ってもみなかった。

回答が司令部向けに取りまとめられたとき、デレン大尉もその場にいた。その時点で、すでに他のいくつかの部署にも同様の照会が行われていた。ヴェイル大佐は、協力するいずれかの公共サービスを通じて対象者の身元が特定された際、共通の手順で報告することを求めていた。報告が存在すること自体は、逮捕の十分な根拠とはならない。しかし、権限を持つ人員を派遣する根拠としては十分だった。

デレンは、市当局に協力を拒否する権利があるのかと尋ねた。

「協力せよとの指示を受けている」とヴェイルは言った。

「確保命令を発した当局からですか？」

「この作戦に対する管轄権を持つ当局からだ」

デレンは技術者の前で、それ以上追及しなかった。技術者はすでに書類をまとめ、退席してよいか誰かが告げてくれるのを待っていた。

その日の午後、地図が新しい版に差し替えられると、いくつもの白い四角が青い線で結ばれていた。下に添えられた説明を読んで、デレンは、それが個別に照会を行わなくとも記録を作戦側へ提供できるようになった機関を表していると理解した。

給水所についての技術者の答えを思い出した。水は生きるために必要だから、人々は給水所を利用するよう指示されていた。その受け取りの手続きが、軍の捜索区域内に自分がいたことを証明するかもしれないなどとは、指示には書かれていなかった。

地図の表示を担当する将校が、まだ協力を確認できていない施設も地図に含めるべきかと尋ねた。

ヴェイルは含めるように言った。確認が取れた時点で、そこの状態を変更すればよかった。

二枚目の地図は、ほぼ市全域を覆っていた。一枚目よりも立派な地図だったが、ロイ・バッティの居場所については、何も新しいことを示していなかった。

02 — 緑色のカードを持つ女

ロイは、建物が密集し、一日の大半を舗道が日陰のままで過ごすような通りに出た。少し先では、屋根のある中庭の入口から人の列が伸びていた。入口の上には、かつて公衆浴場のものだった看板が残っていた。その下に、建物の新しい用途を示す小さな看板が取り付けられていた。

給水所。午後の配給。

彼は列に並ぶことにした。ボトルの水はわずかしか残っておらず、今夜を過ごす場所が見つかるまで、どれほど歩かなければならないか分からなかった。

前には、車輪のついた小さな台に二つの容器をくくりつけた女がいた。片方の車輪が舗道の凹凸に何度も引っかかった。列が進むたび、彼女は台を少し持ち上げなければならなかった。

ロイは手伝おうかと言った。

女は彼の右腕の様子を見た。「どっちがどっちを助けるんだか」

彼は微笑んだ。女は台を引いて段差を越えると、それでも礼を言った。

入口のすぐ内側にはいくつかの掲示があり、その多くは一日の割当量に関するものだった。他の地区から来た人向けの案内に、新しい紙が貼られていた。変更はその日の午後二時から有効となっていた。定められた緊急支給量を超えて水を受け取る場合は、すべて窓口での確認が必要だった。

女は鞄から緑色のカードを取り出した。

「新しいのですか？」とロイは尋ねた。

「カード？　もう何年も使ってるよ。新しいのはあの掲示のほう」

彼女は鞄の中にあるもう一枚のカードを見せた。上の階に住む姉妹のものだった。病気のため給水所に来るのが難しくなっているという。そのカードが今も受け付けてもらえることを願っていた。

女の順番が来ると、窓口で話し合いが始まった。係員は、二つ目の割当分の受け取りを認める前に、受け取る人の身元を確認するよう指示されていた。女のカードには問題がなかった。姉妹の住所も問題なさそうだった。困ったことに、端末は追加の申告がなければ処理を受け付けなかった。

「何を申告すればいいの？」と女は尋ねた。

係員は画面を見た。「分かりません。承認番号が必要だと出ています」

責任者がやって来た。他の給水所に電話する間、待ってほしいと女に頼んだ。後ろから不満の声が上がり始めた。女は空の容器とともに脇へ退いた。

ロイは窓口に進み、ボトルを差し出した。係員は中庭の端にある蛇口を指し示した。配給用の容器で持ち帰るのでなければ、緊急支給量についてはカードは必要なかった。

彼はボトルを満たした。蓋を閉めていると、女が別の係員に、姉妹の病状を再び説明しているのが聞こえた。

そのまま立ち去ることもできた。承認番号について、彼にできることは何もなかった。だが、責任者が窓口に戻り、給水所自身の責任で支給量を計上して受け取りを認めるところまで見届けた。

女は端末に礼を言わなかった。責任者に礼を言った。

女が敷居を越えるとき、ロイは車輪付きの台の片側を左手で持ち上げた。その程度の力でも、予想していなかった痛みが走った。舗道に出る前に手を離した。

「誰かに診てもらったほうがいいよ」と女は言った。

「そういう人を探しているんです」

女は、古い商店がいくつも営業を続けている通りへの道順を教えた。そこには家庭用の機器を修理する男がいて、給水所からの帰り道で疲れた人に、座って休める場所を提供することがあるという。

彼女はロイにカードについて何も尋ねなかった。別れるときも、彼が窓口で何を申告しなければならなかったかより、教えた道順がきちんと伝わったかどうかのほうを気にしていた。

03 — 記録の記録

四時少し前、レイチェルは専門職協会に戻った。受付の女性は彼女を覚えていて、二階の小さな事務室へ案内した。そこで待っていた女はセラ・ミンと名乗った。医療機関や専門職としての義務に関わる紛争について、協会に助言する弁護士だった。

レイチェルはその向かいに座った。先ほど出した一般照会の書類を資料の包みの横に置いたが、まだ包みは開けなかった。

ミンは、協会に政府施設への立ち入りを要求する権限はないと説明した。国家の連続性に関する規定に基づいて発せられた命令に、直接介入することもできない。ただし、会員の業務が中断されたという事実を文書化し、その影響を受ける記録が通常の医療上または研究上の義務の対象になるかを確認する手助けはできるという。

「記録はお手元にありますか？」と彼女は尋ねた。

「一部は」

「原本ですか？」

「写しです。原本については、私の知らないことがあるかもしれません」

ミンは、包みに患者の個人情報が含まれているかと尋ねた。レイチェルは一部に含まれていると答えた。科学的な記録は保全したいが、知る正当な理由のない者に患者の身元や病状を知られることは避けたいのだと説明した。

弁護士はしばらく包みを見つめた。

「それは二つの異なる義務です。一方を果たすために、もう一方に違反することのないようにしなければなりません」

レイチェルがしようとしている二つのことを、どちらも認めてくれた最初の答えだった。

彼女は、実験結果を検討するためにエイドリアンが用意した二枚の書類を取り出した。どちらにも患者の身元は記されていなかった。一枚には試料が安定していた期間が記録されていた。もう一枚には、研究者が試験を不成功と判断した基準が示されていた。

ミンは二枚の上部に記された日付と参照情報を読んだ。独立した研究所でも結果を再現できるのかと尋ねた。

「この二枚だけでは無理です。実験条件と、実際に試験した試料が必要です。それに、この包みには、まだ説明できていない観察結果も入っています」

「では、私たちに何を確認してほしいのですか？」

「これらの記録が存在したことです。失敗を記したページがなくなったからといって、あとから誰かに、試験は成功したと言わせたくないんです」

ミンは、レイチェルから受け取った順に書類を置いた。

協会で、個人を特定できる情報を含まない二枚の写しを受領した事実を記録し、その内容について日付入りの受領確認書を作成することを提案した。実験結果を証明するものではない。写しが完全であることを証明するものでもない。病院での研究が中断されていたその日の午後に、協会が何を受け取ったのかを証明するものだった。

残りの資料には別の取り決めが必要だった。ミンは、資料に適用される制限や関係者の義務をさらに把握するまでは、引き受けないつもりだった。

レイチェルは同意した。受付の女性が写しを作るのを見守り、二枚とも確認してから、提供したものについての簡単な説明書に署名した。二枚目が失敗の記録であることも、その説明には記されていた。

病院を離れてから初めて、彼女がそこから持ち出したものの一部が、病院に属さない機関の管理下に置かれた。

ミンは受領確認書を渡した。「これは、資料の提出命令を免除されることを意味しません。分かりますね？」

「はい」

「そのような命令が出たとしても、書類を提出しなければならないことと、そこに何が書いてあったかを証言できる人間が自分一人しかいないことは違います。今日、私たちが確保したのはそれだけです」

レイチェルは確認書に印字された二つの日付を見た。資料の包みと一緒に鞄に入れた。

帰る前に、彼女は確保命令に基づいて拘束された人についてミンに尋ねた。特定の人物のことだとは言わなかった。弁護士は、機密規定に基づいて回収された人物の法的地位を審査する手続きが公表された例を知らないと言った。

「代理人を立てることはできますか？」

「分かりません」

レイチェルはその日の大半を、ロイに少しも近づけない答えを受け取りながら過ごしていた。今回の答えが違ったのは、答えが存在しないということを認識できる資格のある人間から返された、それだけだった。

04 — ターミナルの男

報告がデレンのもとに届いたのは、五時を少し過ぎたころだった。北部の交通ターミナルで、確保命令の対象者に該当する可能性のある乗客が特定された。本人である可能性が高いと記されていた。現地の警備員が、その乗客をホームに隣接する部屋へ連れていったという。

デレンは報告を読み上げている将校に、本人である可能性が高いと判断した根拠を尋ねた。

将校はターミナルから送られた画像を表示した。暗い色のコートを着た明るい髪の男が写っていた。右手をポケットに入れていた。市内に配布された写真に比べると、画像の質はかなり悪かった。

「身元認証記録も取得しています」と将校は付け加えた。

「それはロイ・バッティのものか？」

「いいえ、大尉」

その男の身元認証記録は、電気設備の保守作業員のものだった。雇用に関する記載と、二つの地区の間を移動した履歴があった。警備員は、部屋にいる人物がその記録を使用する正当な権利を持つ本人であるかどうか、すぐには確かめられなかった。そのため応援を要請したのだった。

軍の連絡将校が、M-04をターミナルに派遣することを提案した。すでに北部地区におり、当初この報告に対応するよう割り当てられた人員よりも早く到着できるという。

デレンは、乗客を解放してよいかどうかを判断する権限のある将校を同行させるよう求めた。そのような権限が必要かどうかについて短い議論が行われた。最終的に、中尉が一人割り当てられた。

M-04がターミナルの部屋に入ると、乗客は所持品を並べられた机のそばに座っていた。交通局の責任者が、男の雇用主に連絡を取ろうとしていた。

乗客は怒っていた。雇用記録の写真が別の書類の写真よりも古い理由について、何度も説明するよう求められていた。そのたび同じ説明をした。彼が知りたかったのは、自分の住む地区へ行く最後の乗り継ぎ便を逃したのかどうかだった。

M-04は男の顔を見た。病院でロイを至近距離から見ていた。目の前の男はロイではなかった。

「この人物は対象者ではありません」と中尉に告げた。

中尉は、外見だけでそう判断したのかと尋ねた。

「私は対象者に会っています」

「外見が変化している可能性もある」

M-04は乗客のほうを向いた。男の右手の甲には、何か月も前に皮膚が損傷した跡が白く残っていた。ロイとの対峙のあと、自分が体勢を立て直したときに、彼の手を見ていた。そのような跡はなかった。

その違いを中尉に説明した。数分後、交通局の責任者も雇用主から確認を得た。双方の確認を合わせれば、男の解放を認めるには十分だった。

乗客は所持品を集め、失った時間を誰が補償してくれるのかと尋ねた。責任者は苦情を申し立てる窓口を教えた。しかし、軍の作戦に関する苦情がどう扱われるのかを説明できる者は、その部屋にはいなかった。

男が去ったあと、中尉は報告書を完成させた。M-04は、中尉が身元特定の不成功を示す項目を選択するのを見ていた。乗客が乗り継ぎ便を逃したことを記す欄はなかった。

訂正された記録の写しを司令部も受け取るのかと、彼は尋ねた。

「当然だ」

「最初の記録を受け取ったのと同じ人間が？」

中尉は画面を見た。訂正内容は作戦司令部へ送られると言った。ターミナルで撮影された写真を他のどの部署が受け取ったかについては、答えられなかった。

M-04は、その地区に留まるよう命じられた。ホームに出て、列車を待つ乗客たちを眺めた。電気設備の作業員は、もうその中にはいなかった。

あの男が、ほとんど何もしていないのに作戦の一部となったことを理解した。ふと、自分自身がその一部となるために何をしたのだろうと考えた。

05 — 止まった時計

女性がロイに教えてくれた店は、通りに並ぶほかの店よりも間口が狭かった。窓越しに、修理を待つ電化製品が一列に並んでいるのが見えた。その上には十数個の時計が掛けられていたが、同じ時刻を示すものは一つもなかった。

ロイが入っていくと、店主は故障した扇風機を回そうとしていた。スイッチを切って顔を上げた。

給水所にいた女性から、ここで少し休ませてもらえるかもしれないと言われたのだとロイは説明した。男は扉の近くにある椅子を指差した。

「扇風機でもつけてあげたいんだが、ご覧のとおり、少々手こずっていてね」

ロイは腰を下ろした。動くのをやめると、脚にかかっていた負担が感じられた。男はそれ以上何も聞かず、扇風機の修理に戻った。

作業台の上にある棚には、給水ポンプの部品が集められていた。その中には、都市の古い地区で見た覚えのある型のものもあった。製造元はもう密封部品を供給していないのだと店主は言った。修理の見込みがないポンプから、まだ使える部品を取り出していたという。

ロイは、この地区がいつから給水所に頼るようになったのかを尋ねた。

「上の階まで水が届かなくなってからだよ。まだ何とかなっている建物もある。配管次第だね」

男は壁から時計を一つ外して作業台に置いた。蓋を外し、小さな工具の先で歯車の一つを回した。

ロイは窓枠に挟み込まれた写真に気づいた。今よりも大きな作業場の前で、店主がずっと若い男と並んで立っていた。店主は彼の視線を追った。

「息子だよ。隣の地区で一緒に店をやっていたんだ。何を修理する価値がないか判断するのは、あいつの方が上手だった」

「今はどこに？」

「南部にいる。私にも一緒に来てほしいと言っていたがね。ずいぶん多くのものを置いていくことになっただろう」

男は時計の方へ手を向けた。時計のことを言っているのか、それを店に持ってきた人々のことを言っているのか、ロイには分からなかった。

通りの向かい側の拡声器から、公共の告知が流れ始めた。現在の緊急措置のもとで調査を行う権限を与えられた職員に対し、地区の住民は協力するよう求められていた。通常の商業活動には影響しないという説明もあった。

店主は告知が終わるまで手を止めていた。

「昨日も同じことを言っていたよ」

彼は時計を裏返した。数分後、秒針が動き始めた。ロイのそばの作業台にそれを置き、持ち主の名前を書くための紙を探した。

外で物音がした。ロイが顔を上げると、市の車両が交差点の近くに停まり、二人の職員が建物に告知を貼り付けていた。店主は何をしているのか確かめるため、入口に向かった。

戻ってくると、作業台から電話を取った。宿泊サービスを提供する事業者は、宿泊客の身元を確認することになっていた。雇用記録を管理する者には別の指示があった。どの部分が修理店にも適用されるのか、判断しようとしていた。

ロイは、男がこの建物に住んでいるのかを尋ねた。

「二階にね。店の奥にも部屋が二つある。息子が機材を置いていた場所だよ」

店主は再びロイの肩を見た。今晩行くところがあるのかと尋ねた。

ロイは、ないと答えた。

「朝まで泊まっていってもいい。ただ、医者が必要なら、ここでは大したことはしてやれないよ」

ロイは通りの方を見た。職員たちは隣の建物にまで来ていた。彼らが店内に入ってくるのかも、店主がすでに自分の正体に気づいているのかも分からなかった。

「私を捜している人間がいるかもしれない」と彼は言った。

男はしばらく黙っていた。修理した時計を少し自分の方に引き寄せた。それから、その人々が今晩この店に来ると考えた方がいいのかとロイに尋ねた。

「分からない」

店主はその答えについて考えた。申し出を取り消すつもりはないとロイに告げた。ただし、状況が変わったら知らせてほしいと付け加えた。

ロイは礼を言った。一晩過ごせる場所を見つけた。だがそこは、彼を留まらせるという決断によって自分の生活が変わってしまうかもしれない人のものだった。自分が申し出を受け入れる言葉を口にするまで、その側面について考えていなかった。

06 — 存在しない部門

病院では、六時少し前にイマニ医師が自分の執務室へ戻ることを許された。研究室の廊下にはまだ規制が敷かれていた。午後の一部を、診断棟の閉鎖によって居場所を失った患者の治療を手配するために費やしていた。

管理部門の女性が、何通かの文書を机に置いていった。その中には、病院のかつての患者について、推定される現在の容体を評価するよう求める軍の医療連絡担当からの要請があった。

名前はロイ・バッティだった。

イマニは要請書を二度読んだ。患者がさらに身体活動を続けられるかどうかを判断し、以前の機能水準に戻るまでに要する時間を推定するよう求めていた。患者を診察することについては何も記されていなかった。

彼女は紙の下部に記された番号に電話をかけた。

男が応答した。作戦に従事する人員を支援するために作成された要請書だと説明した。

「退院してから彼は診察を受けたのですか？」とイマニは尋ねた。

「私の知る限りでは、受けていません」

「それなら現在の評価はできません。彼に医療が必要な理由はお伝えできます」

男は、彼女が治療を担当していた期間に得られた関連所見を含めるように言った。一定の出力割合を基準にして、それらの所見から負傷した身体の動作を予測することはできないと説明すると、男は不満そうだった。

「推奨された上限を超えた可能性はありますか？」

「すでに超えています。それも、その数値では現在の容体を説明できない理由の一つです」

男は回答を書面にするよう求めた。

イマニは、自分が把握している情報の限界について短い文書を書いた。患者に無理に身体を動かさせようとすれば容体が悪化する恐れがあり、外見上苦痛を示していないからといって、その危険がない証拠にはならないと付け加えた。

送信する前に、病院のシステムに入力された宛先を確認した。受け取り先の医療部門の名称は知らないものだった。同僚が公開されている機関の名簿を調べたが、該当する機関は見つからなかった。

イマニはもう一度電話をかけ、文書を受け取るのは医師なのかを尋ねた。

「医療連絡担当に届きます」

「それを解釈する責任を負う医師は誰ですか？」

男は、その部門は公表されていないと説明した。所属する職員の名前を明かすことは許されていないという。

彼女は、その部門が患者の治療に責任を負うことになったのかと尋ねた。

男は、そうではないと答えた。

電話を切ったあと、イマニは速やかな診察の必要性と、強制的に身体を動かさせることに伴う危険に限定した文書を送った。その写しを病院の医療関係の往復文書に残した。詳細な所見は患者の診療記録に留めた。

扉を叩く音がした。エイドリアン・タイレルが、検査を終えて返却された文書を箱に入れて立っていた。規制対象となった試料にアクセスする必要がない限り、一部の分析作業は続けてよいと告げられたという。

イマニは受け取った要請書を彼に見せた。

エイドリアンも、彼らが調べた材料がどの程度の性能を発揮し得るかについて、同様の質問を受けていたという。問い合わせを行った部門を特定することはできなかった。

「試料には病院で使っている名前が記されていたの？」とイマニは尋ねた。

「いや。一度も見たことのない識別番号が使われていた」

彼は箱を開け、その識別番号を書き留めた紙を見つけた。それが何を指すのか突き止める前に要請は撤回されていた。シリーズの識別子と改訂番号に続き、「参照」という語が記されていた。

イマニにも覚えがなかった。

エイドリアンは紙を戻した。問い合わせ元の名称がどちらも見慣れないものだったというだけで、二つの問い合わせが同じ材料についてのものだと考えるわけにはいかない。また要請が来たら、説明を求めるつもりだと彼は言った。

外では看護師を通すために誰かが仮設の仕切りを取り外していた。その向こうには、いつもどおりの病棟案内が見えた。イマニは長年この病院に勤めてきたので、それぞれの病棟にいる人々の責任者が誰なのかを知っていた。

しかし、階下の部屋で自分たちが治療した男については、彼の治療に責任を負うと認めた機関を、もはや一つも挙げることができなかった。

07 — 二度記された名前

レイチェルは通りの端まであと少しのところで、駅の入口周辺に貼られた告知を目にした。確保作戦に関する告知は、前日の夕方に見たものとは違っていた。写真の下に、今は二つの別々の指示があった。

ロイの所在を突き止め、指定当局に報告すること。レイチェルについては、規制対象の研究資料の持ち出しに関して、事情聴取が可能な状態に置くこと。

彼女の写真は彼のものより小さかった。その下には彼女自身の名前が記されていた。

列車が到着し、乗客の一団が駅から出てきた。一人の男が出ていく途中で二枚の写真にちらりと目を向けた。次の一団がそこへたどり着く前に、レイチェルは入口から離れた。

ロイと落ち合う約束をしていた地区へ、列車で向かうつもりだった。今朝はそこへたどり着けなかったため、協会を出たあとでもう一度試みることにしていた。告知があるからといって、駅で誰かが彼女の正体に気づくとは限らない。だが、そこへ向かおうとするだけで、研究資料を危険にさらす可能性があることは確かだった。

彼女は道路を渡り、ボランティアからもらった街路案内図を開いた。歩いて行ける範囲に、ほかに二つの駅があった。目的地までの距離を確かめてから、案内図を閉じた。

協会では、セラ・ミンのもとに専門職登録事務局から連絡が入っていた。病院に由来する文書の保全に関するものだった。中断された研究について協会に協力を求めた人物がいれば、その身元を明らかにするよう求められていた。

受付の職員がその連絡文書をミンの執務室へ持ってきた。その午後、女性が一人来ていたことは知っていたが、この要請が彼女に該当するのかどうかは分からなかった。

ミンは文書を読んだ。確保命令への言及があったが、命令書そのものの写しは添付されていなかった。発信元の事務局がこれまで扱っていたのは、専門職の登録に関する問題であり、機密資料の調査ではなかった。

彼女は連絡文書に名前が記載された役人に電話をかけた。男は、別の当局に代わって自分の部門が情報を集めているのだと説明した。

「法律家に相談した人々の身元を明らかにするよう、求めているのですか？」

「研究についてそちらの協会に問い合わせた人々を特定するようお願いしています」

「それには法律家に相談した人も含まれます。秘密が守られるべき法律相談について、除外規定はあるのですか？」

役人には分からなかった。要請を出した当局にその質問を提出すると言った。

ミンは書面での回答を求めた。それが届くまでは、情報を提供するつもりはなかった。

受付の職員は、彼女が電話を置くのを待った。「私たち、何か間違ったことをしたんでしょうか？」

「いいえ。誰かが私たちに質問してきたのです。その人に回答を受ける権利があるのか、確かめる必要があるのです」

要請に続いて命令が出されれば、協会に何らかの影響が及ぶ可能性があることをミンは承知していた。執務室を出る前に法務委員会の委員長に知らせることにした。

レイチェルのために作成した受領確認書に目を通した。同じ名前が二つの欄に記入されていた。一つは文書を提供した人物を、もう一つは文書についての記載内容を確認し、了承した人物を示すものだった。ミンはその女性の法的な身分も、その名前を使用する権利があるのかど

うかも確認していなかった。それらの書類を受領したと認めるのに、どちらを確認する必要もなかった。

受領書は、彼女の執務室で起きた出来事についての記録だった。机の上の連絡文書は、その出来事を可能にした人物の拘束につながり得る情報を求めていた。

今のところ、どちらの文書も彼女の手元にあった。

08 — 明かりが消える前に

店主が修理店を閉める頃までに、ロイは一晩過ごしてよい部屋へ案内されていた。狭いベッドと古い戸棚、すでに製造されていない機器の説明書が何冊も置かれた棚があった。店主はベッドの上にあった電気部品の箱を移動させてくれた。

ロイは窓のそばに座った。電話のバッテリーはほとんど残っていなかった。それを見た店主が充電器を貸してくれると言い、ロイは少しためらった末に受け取った。電話をつなぎ、画面が明るくなるのを待った。

レイチェルからのメッセージはなかった。

その日、彼女が病院にたどり着いたのか、エイドリアンと連絡を取る方法を見つけたのか、何度も考えた。彼女がほかに行けそうな場所を口にしていたかどうかは思い出せなかった。離別したあとに起こり得るすべての問題について話し合うには、目の前の問題があまりに多すぎた。

二人が最後に交わした会話を開いた。まもなく再び自分に会えると信じていた女性が書いた言葉を読んでいるのだと、ふと思った。

生きていることを彼女に知らせるために、何か書きたかった。

だが代わりに、電話を棚に置いた。翌日について、確信をもってできる約束は何もなかった。彼女がまだ自分に連絡する別の手段を見つけていないなら、自分が彼女に連絡するための別の方法を見つけなければならなかった。

部屋の明かりがちらついた。店の方から、ここ数週間ずっと起きているのと同じ問題だ、と店主が声をかけた。ロイは扉の方へ向かったが、男は自分のために起き上がらなくてもいいと言った。

司令部では、夕方の報告会に向けて身元確認に関する報告書が作成されていた。デレン大尉は交通ターミナルでの出来事についての記述を読んだ。乗客が解放されたと知って安堵した。同時に、まだ詳しい事情が明らかにされていない状況で、ほかに三人が一時的に拘束されたことも知った。

彼はターミナルの報告書の原版と訂正版を併せて配布するよう求めた。担当将校は、この作戦が管理する記録なら修正できると答えた。ほかの受信者は、自分たちの写しを自分たちで修正しなければならなかった。

デレンは地図を見た。午後のうちに青い線は数を増していた。住宅地区からの報告が加えられ、二軒の薬局の位置も記されていた。どちらの薬局も、報告に記載された人物の身元を確認してはいなかった。

ヴェイルが統合参謀部からの覚書を持って入ってきた。翌朝には、さらに機密指定された人員が作戦に配属されることになっていた。彼らの識別番号は、受け入れを担当する将校に通知されるものとし、通常の配属記録には含めないことになっていた。

「何人ですか？」とデレンは尋ねた。

「最終的な人数はまだ確定していない」

「M-04と同じ指示を受けるのですか？」

ヴェイルは、それぞれの任務に適した指示を受けると答えた。それ以上の説明はしなかった。

デレンは連絡将校たちが働いている仕切りの向こうへ目を向けた。今やこの建物には、制服を見ただけではどのような権限を持つのか判断できない者がいた。朝になれば、指揮下にある人員を把握するために普段使っている記録によっては、その存在すら確認できない人員がいることになる。

都市の反対側では、レイチェルが混み合った食堂のテーブルに座っていた。その午後に受け取った受領確認書を広げた。もう一度読んでから鞄に戻した。次に協会へ行くときは、病院を介さずに連絡を受け取る手段を確立するため、法律家の助けを得られるか尋ねる必要があった。

修理店では、数分間電気が止まった。ロイは明かりが戻るのを待ってから、電話の接続を確かめた。窓から交差点の公共スクリーンが見えた。停電の際には暗くなっていたが、今はいつもの告知を映し出していた。

写真の男について情報を持つ者は、指定当局に連絡するよう求める告知があった。

ロイは窓から離れた。店にある時計の音が壁越しに聞こえた。停電の間も止まらなかった時計だった。

その音が耳に馴染むまで、彼は聞いていた。

第02章 終。